

# みすゞさんの桜と、 のり子さんの空

函館市医師会  
函館渡辺病院

みずせき 水関  
きよし 清

この国に生きて春を迎える喜びのなかで、しっかりとその一角を占めてきた「花見」。その愉しみが、密集・密接を避ける、という号令の下で見送られたのが、2020年春であった。

それまで、現代人にとって消極的価値しか持たないと思われてきた、出歩かないこと・人に接しないこと・境界を越えて他所に行かないこと、などの行為が、一転してこれほどまでに、生きのびるための積極的な意味を付与されることになった、忘れがたい春でもあった。

終戦を動員先の海軍の工場で迎えた当時、二十歳目だった詩人・茨木のり子は、「根府川の家」で、「沖に光る波のひとひら／あゝそんなかゞやきに似た／十代の歲月／風船のように消えた／無知で純粹で徒勞だつた歲月」と、慨嘆した。そして、過ぎ去った時間の重さを思い、代表作「わたしが一番きれいだったとき」には、次のように書いた。

「わたしが一番きれいだったとき／街々はがらがら崩れていって／とんでもないところから／青空なんか見えたりした（中略）だから決めた できれば長生きすることに／年とってから凄く美しい絵を描いた／フランスのルオー爺さんのように／ ね」

これを承けて構想されたものかもしれない、もう一つの代表作「さくら」には、こうある。

「ことしも生きて／さくらを見えています／ひとは生涯に／何回ぐらいさくらをみるのかしら／ものごころつくのが十歳ぐらいなら／どんなに多くても七十回ぐらい（中略）さくらふぶきの下をふららと歩けば／一瞬／名僧のごとくにわかるのです／死こそ常態／生はいとしき蟹気楼と」

1982年6月20日、3冊の詩作手帳『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』の存在が明らかになったことを契機として再発見が進んだ、大正末期から昭和初期の時代に500編余の詩稿を残した詩人・金子みすゞには、「灰」という作品がある（金子みすゞ童謡集「明るいほうへ」JULA出版局、1995.）。

「花さかじいさん、はいおくれ、／ざるにのこったはいおくれ、／わたしはいいことするんだよ。

さくら、もくれん、なし、すもも、／そんなものへはまきゃしない、／どうせ春にはさくんだよ。

一度もあかい花さかぬ、／つまらなそうな、森の木に、／はいのありたけまくんだよ。

もしもみごとにさいたなら、／どんなにその木はうれしかろ、／どんなにわたしもうれしかろ。」

日頃、気づかれないものや、見過ごされがちなものに焦点を当ててきたこの作者の、優しいだけではないものの見かたの新鮮さがうかがえる。

「花咲かじい」の原典によれば、「灰」は、正直

爺さんの愛犬・白の墓標がわりに植えた松を伐って白にしたものを、隣人の意地悪爺さんが燃やしたものである。その灰を、愛犬・白の墓のところにまで持ち帰る途中、にわかにかいてきた風が、灰をいっぱい吹き散らしてしまい、灰が着いた梅や桜の木には、途端に花が咲いて一面の春景色になったという（楠山正雄編「日本童話宝玉集」（上中下版）（童話春秋社から1948～1949年発行）を底本の親本とした青空文庫の記載による）。愛犬・白に対する隣人の意地悪に耐えている正直者の爺さんは、自ら花を咲かせることを望んで灰を撒いたのではなく、たまたま吹いてきた風が、もともと花の咲く木に灰を吹き付けたために、一面の春景色になって、嘆く正直爺さんを喜ばせたのである。

金子みすゞは、自らが「花咲かじい」譚のなかの「風」になることで、花の咲かない木にも、灰の力で見事な花を咲かせられたら、木もうれしいし、その花を見た作者・みすゞもうれしい、というのだ。

花を見て、人のこころは愉しむのである。そして、同じ花を見上げる他者のこころの中に、自らと同じ思いのあることを想像しながら、その花の下で人びとは食を共にするのである。満開の季節の後、旺盛な茂りを見せる葉桜の時期がやってくる。独特の甘い香りを放つオオシマザクラの、伸び始めたばかりの柔らかい葉を塩づけにしたもので包んださくら餅は、湿った竹皮の中で光を蓄える。塩漬けにすることで甘い香りを際立たせた若葉に包まれた、餅生地のおもてには、地上にこぼれ落ちてきた花明かりが、つぶつぶの光となって宿る。ひと口含めば、かぐわしい若葉の香りは鼻に抜け、続いて餡の甘さが少しずつ広がり始める。お互いの瞳の中に生まれてきた笑みを確かめ合ったのち、甘さを呑み込んだばかりの口許から、思わずこぼれ出てくる笑みもまた、確かめ合う。

このように、日々私たちがいただく食べ物には、色があり、香りがあり、光がそれに寄り添う。それらは本来、自然の息吹きが蓄えた、彩りのなかから生まれ出たもの。そのような四季の恵みに人びとの手が加えられて食卓にのぼると、それらの恵みを食べた人のいのちへと、姿を変えていくのだ。

人が言葉を持つ前に、人と人をつないでいたのは、食事だった。そして、同じ場所でもともに食べるということ、さらに理解したのだ。身体とともに、こころのなかにも、栄養を通わせることができるということ。ともに食べるということは、人と人との協働の根元にあつて人類の進化を支え続け、そうした長い過程の中で築き上げられてきた、ヒトにとって大切な「社会力」なのだ。

限られた人とだけ、限られた場所で食べる、「三密」を避けるための新しい食の形。その基盤の脆さをも思い知らされてきた、2020年春からの日々。身体だけは一応満たされるが、こころは悲鳴をあげる。

わかったつもりになっていた、ともに食べることで発展してきたヒトの社会の実像は、途方もなく多くの要素が組み合わさられて、互いに干渉することなく動いてきた偶然の産物だったのではなかろうか。